※インターネット「**はらまち九条の会**」で、「**九条はらまち**」の全号を見ることができます。

九条はらまち

「はらまち九条の会」ニュース **No. 104**

2009（平成21）年7月16日（木）発行　芙蓉

＜終戦の1カ月前の1945（昭和20）年7月16日、アメリカはニューメキシコ州で初の原爆実験に成功＞

●アメリカ国内でもルーズベルト大統領など4人で極秘にすすめられた原子爆弾製造の「マンハッタン計画」は、ついに史上初、ソ連よりも早くに成功する。この日午前5時30分、ニューメキシコ州アラモゴールドの荒野に閃光がきらめき、巨大なキノコ雲が立ち上った＜左写真＞。実験は午前4時の予定だったが雷雨で何度か延長され、計画の総指揮官の将軍グローブズと物理学者オッペンハイマーで5時30分と決定。秒読みが開始されると恐ろしい静寂があたりを支配したという。●アメリカでは現在でも「日本への原爆投下は、終戦を早めることになり正しかった」と考える人が圧倒的に多く、核抑止論が常識となっている。

私の体験 29

広島で二次、長崎で直接被爆し 二度の被爆を体験した

相馬市原釜　Aさん（故人　匿名）

＜前編＞

私は大正九年、相馬市に生れました。私の場合は、広島と長崎の両方の原爆を体験した、いわゆる二重被爆者です。

軍隊検査は甲種合格 横須賀海兵団で激戦に参加

私は若い頃は、プレス工として東京で働いていました、現在と違い体はがっちりした健康体でしたから、軍隊検査も甲種合格で召集され、筑波海軍航空隊に入りました。

軍艦「隼鷹（じゅんよう）」に乗り込み、昭和十六年一月からは横須賀海兵団に入り、海軍整備兵として、シンガポール、マニラ、トラック、アリューシャンなどに出向きました。いずれも激戦地で、特に「ア号作戦」として有名ですが、第一次、二次、三次の南太平洋の激戦に参加しましたが、よく海の藻屑と消えずに生還できたのが不思議なくらいです。

最後は航空母艦とともに九州の佐世保付近の港に逃げ込み、敵機の目をごまかすため、その母艦を木の枝なんかで擬装して隠すようなこともしました。

八月六日、軍の命令で兵器を受け取りに長崎へ出発

ところが敗戦も間近な昭和二十年八月、私は特殊部隊に編入されていて、軍の命令を受けました。その命令とは、私の所属する横須賀海軍工作学校から、長崎の海軍武官府へ秘密兵器部品を受け取りに行け、という命令でした。

八月六日、広島に原爆が投下された日ですが、M技術中尉を上官に、私たちは四人で横須賀を出発しました。

原爆投下の翌日 広島を歩いて通過

翌七日、私たちを乗せた汽車は山陽本線の広島付近まで行ったところでストップしました。広島は前日の原爆投下で壊滅状態でした。

今でこそ原爆とわかりますが、その時はすごい爆弾だ、と考えるだけでした。街の方々が燃えていて、焼夷弾にしては破壊力がすごいし、単なる爆弾にしては火事が随分起きていて不思議に感じました。ともかく、軍の命令で派遣されていた私たちは引き返すこともできず、汽車を降り徒歩で広島の街を通らなければなりませんでした。

（裏のページへ）

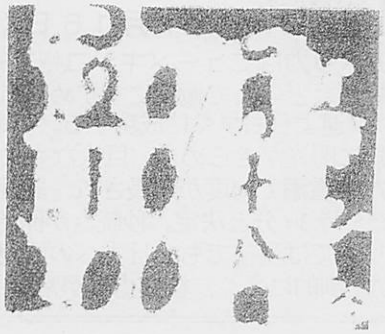
■この体験談は、1983（昭和58）年に「原水爆を考える原町市民の会」編集発行の『私も証言する』から転載しました。この本には、相双地区在住の広島・長崎の被爆者20名の体験談が掲載されています。

（表のページより）

広島駅の時刻表の黒い部分だけが焼けていた

広島城など何にもなくなっていましたし、道路には人々がまだピクピクと動くだけの状態でいたり、人も馬も死体となって一緒にあちこちにゴロゴロしていました。広島駅に立ち寄ったのですが、時刻表の黒い文字のところが焼けて、白い部分がそのまま残っていたことを覚えています。

放射能に汚染された広島の街を、そんなふうに原爆投下の翌日の八月七日に歩いたのですから、これが私の第一回目の被爆体験です。その時にもう私は被爆してしまっていたんですね。



▲原爆の熱戦で焼き抜かれた文字
（広島原爆資料館『ヒロシマ』より）

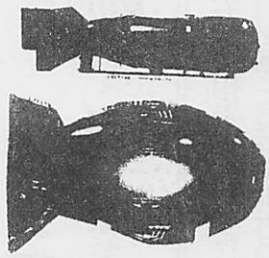
Aさんが広島駅で目撃したように、確かに文字の黒い部分だけが焼けていて、白い部分はそのまま残っている。

八月九日の朝、長崎にようやく到着

広島の西の方の駅から再び山陽本線に乗って、途中もう一度汽車を降りてトラックで運ばれ、また汽車に乗り込み、長崎には九日の朝に着きました。長崎駅からそれほど離れていない旅館に宿をとりました。着いたばかりで旅館の名前なども覚えていないし、町名などもわかりません。覚えているのは、旅館の窓から見えた火の見櫓とガスタンクぐらいです。被爆地が明確でないことが、戦後に諸手当を申請する際に書類不備でつっ返される理由になってしまいますが、でも知らないものは知らないのです。

十一時二分、長崎で直接被爆する

九日朝に長崎に着いた私たちはその旅館に入って、それまで食べるものも食べずにいたので、まず食事を頼んで待っていたその時、原爆が投下されました。十一時二分ですか。一瞬夕焼けのような光、それは金色でも赤色でもないような光を感じ、すぐにものすごい音がして、それっきり私は気を失ってしまいました。よくピカドンといいますが、そんな感じです。



▲投下された2つの原子爆弾
●写真上が、広島に投下されたウラン爆弾の“リトルボーイ”。TNT火薬12.5kt相当。長さ約3m、重さ4t。●写真下が、長崎に投下のプルトニウム爆弾の“ファットマン”。広島型より強力で、TNT火薬22kt相当の破壊力があった。長さ約3.2m、重さ4.5t。

気がつけば諫早の病院に

気がついた時は、佐世保海軍病院諫早（いさはや）分院の中にいました。右の頬にガラス片が突き刺さり手術をして抜きました。その傷はこのとおり大きく残っています。私は軍人でしたから軍の病院に収容され治療を受けることができましたが、私以外のけがや火傷をしていても、道端にほっぽりだされていた人も多かったはずです。

諫早分院から看護婦付きで佐世保海軍病院へ車で移され、そこに約一ヶ月いて、汽車で横須賀に運ばれ、相馬へは九月半ばに帰ることができました。

（戦後の生活の様子は、次号の「後編」に続きます）

◇　◇　◇

◆Aさんは平成三年三月六日、七一歳で死去されますが、以上のように広島と長崎で、「二重被爆」の稀有な体験をお持ちでした。ご家族のご理解をいただき掲載しました。

◆この体験談は、二十六年前の一九八三（昭和五十八）年一月六日、Aさん宅を訪問し、被爆の状況や生活の様子を直接うかがい、それを文章化したものです。

その後何度も訪問し、体験のビデオ撮影にも快く応じてくれて、映像も残されています。

◆Aさんのご冥福を心よりお祈り申し上げます。

●2004（平成16）年の調査で「二重被爆者」は、全国で165名（広島・長崎の直接被爆者は9名）が判明しています。生存が確認された方だけの数ですから、実際にはもっと多いと思われます。

●2005年に映画『二重被爆』<左写真>が話題になりましたが、出演の93歳山口彊（つとむ）さんの被爆者健康手帳に長崎市は、今年2009年3月24日に「二重被爆」を証明する内容を追加記載しました。いつも行政は遅れがちです。また、山口彊著『ヒロシマ・ナガサキ二重被爆』こんな人生があっていいのか、朝日新聞社発行、￥651の本も発売中です。